

タトゥーを入れる世代と反対する世代

～ファッション化するタトゥー～

富田はる乃

本論を取り上げたきっかけは、世代によってタトゥーに対する認識の違いや、現代の若者がタトゥーをファッションの一部として認識しているのではないかと疑問に思い深い関心を抱くようになったからである。

現在の日本の若者の中で、タトゥーは、ファッションの1つとして存在していると考えられる。理由としては、タトゥーシールやジャグアタトゥーがファッション雑誌に取り上げられ付録になっていること、以前よりもタトゥーを入れている若者を目にするようになったことが挙げられる。しかし、現在の日本では13世紀から犯罪者や社会に好ましくない人間が周囲の人に警戒させる意味の記号として存在していたことや、1960年代に上映されたヤクザ映画の役者の身体に入れ墨が入っていたことから、反社会的な恐怖感のあるイメージが根強く印象づけられている。そのため、入れ墨を入れている人が入浴施設に入ることを拒否する施設が多く存在しているのが現状である。

世代によって異なるタトゥーの受容と認識の違いについてはアンケート調査を実施した。その結果、10代～20代の世代は肯定的な意見が多い結果となった。否定的やマイナスな回答をしている人でもワンポイントタトゥーや可愛いデザインであるとファッションの一部として認識していることが分かった。SNSの普及によってタトゥーというコンテンツを多く見かけるようになったことから、身近な存在へと変化していったのだと筆者は考える。また、40代～50代の世代は反社会的なイメージが強くあることから、否定的な意見が多い結果となった。肯定的な意見を持っている人でもワンポイントタトゥーや可愛いデザインだからといって反社会的なイメージを拭うことはできないという結果となった。

現状では否定的な意見を持っている人が多く存在していて、理由は一環として反社会的でヤクザの象徴としての印象が強いからである。タトゥーに対して肯定的な意見を持っている人がいても、日本のタトゥーに対しての印象は変わらないのである。

このことから、ファッションとしてのタトゥーが浸透するのは難しいと考える。しかし、他国の歴史を調べていく中で、通過儀礼の一種であることやアイデンティティを守るための大切な存在であることを学んだ。タトゥーをファッションの一部として楽しむ新しい文化が日本の若者の中では流行になっていくのではないかと、筆者は考えるため、タトゥーが入っているからといって反社会的な人物として差別をすることは違うのではないかと考える。そのため、少しずつではあるが、タトゥーや入れ墨に対する印象も緩和するのではないかと考察する。